
自分の口

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分の口

【Nコード】

N3232R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ニュースキヤスター鳩山由人は口では正義を語りながら己はやりたい放題だった。だが彼はネットで正体を暴かれ遂には。名前はともかく主人公のモデルは某ニュースキヤスターです。その人物の行動や発言があまりにも目に余るので書いた作品です。

第一章

自分の口

鳩山由人は今日もテレビに出ていた。立派なスーツ姿で言う。丸眼鏡をかけた白い細面の顔をしており髪の毛は適度にあげて分けている。

「少しは庶民のことをですね」

「こう言うのが口癖だった。」

「考えてもらわないと」

「全くですよ」

「その通りですよ」

誰もが鳩山のその言葉に頷く。彼はニュースキャスターだ。いつも夜の十字から出て来てだ。その時間にこの世を正す番組を切り盛りしていた。

その彼はだ。いつも言うのだった。

「この失言も」

「漢字の間違いも」

「贅沢なんですよ」

自分ではこう言う。しかしであった。

自分はだ。いつもネットで指摘されていた。

「こいつまた言葉間違えたな」

「漢字が違うぞ、漢字が」

「はあ！？その時そんなのなかったぞ」

「贅沢って。御前年に五億もらってるだろうが」

「こう指摘されるのだった。」

「だから何で庶民なんだよ」

「こいつは少なくとも庶民じゃないだろ」

「全然違うだろ」

このことが指摘される。だがそれはテレビや新聞ではそれが全く

指摘されないのです。鳩山はそんな批判なぞ何処吹く風だった。

彼はまさに得意の絶頂にあった。銀座のクラブでだ。ホステス達をはべらせて最高級のスコッチをがぶがぶと飲みながら言うのである。

「俺が世界を動かしてるんだよ」

「あら、凄いわね」

「そこまでするのね」

「ああ、そうだよ」

顔を真つ赤にさせて笑顔で言うのだった。

「政治家だろうが官僚だろうが俺が文句をつけられな」

「それで終わりなのね」

「何もかも」

「ああ、そうだ」

まさにその通りだというのである。

「それで終わりだ。俺が一番なんだ」

「一番って？」

「先生、何がですか？」

「俺が一番強いんだよ」

「こう言うのである。」

「マスコミ、テレビには誰も逆らえないんだよ」

「あらあら、強気ですね」

「それはまた」

「政治家も官僚も俺が言えばな」

さらに言う鳩山だった。

「それで終わりだ。俺には誰も勝てないんだよ」

「あら、先生」

ここで横にいるホステルが声をあげた。鳩山は彼の胸をまさぐりだしたのだ。しかも服の中に手を入れてだ。直接しだしたのだった。

「それはおいたですよ」

「いいだろ？今晚な」

鳩山は下卑た顔でそのホステスに言う。

「どうだ？」

「けれど先生ご家族が」

「ああ、そんなのどうでもいいんだよ」

彼はテレビで政治家や官僚の女性問題を追及してもいる。

第二章

「どうだよ、それで。百万出すぞ」

「百万ですか」

「この前政治家連中から巻き上げたんだ」

「そうだとするのである。」

「だからな。どうだ？」

「いえ、今日は」

「何だ、つれないな」

「すいませんね。まあこれをどうぞ」

ここでレミールランタンを出すのだった。鳩山はそれをラッパ飲みする。これが彼であった。まさに得意の絶頂にあると言ってよかつた。

テレビはまさに無敵だった。だが、だった。

ある日ネットでだ。こんなことが書かれたのだった。

「鳩山銀座でひでえんだよ」

「何だ？何やったんだ？」

「銀座か」

「ああ、ホステスにセクハラしてんだよ」

「まずはここから言われたのだった。」

「もう殆ど風俗まがいだな」

「えっ、そんなに酷いのか？」

「そこまでなのか？」

「おまけに言っていることも酷いんだよ」

「このことも言われた。」

「もうな。俺は何でもできるって口調だな」

「おい、それじゃああれだろ？」

「あいつがテレビで言ってることじゃないか」

「なあ、政治家とか官僚とか糾弾してるのとな」

「それと同じじゃないか」
「それでな」

「ここで最初に書いた人間が提案した。
今度その店に潜伏してみる。金があるからな」
「それでか」

「実際に動画撮るんだな」

「ああ、やってみる」

「そうするとうのだった。」

「あいつに見つからないようにな。店の人と話してな」

「おつ、店の人も協力してくれるのか」

「そうしてくれるんだな」

「鳩山のやりたい放題に頭にきてるらしいんだよ」

「それでだというのだ。」

「それであいつを何とかしたいらしくてな」

「それでか」

「それでなんだな」

「ああ、それでだ」

「まさにそれでだというのだった。」

「協力してくれるみたいだしな」

「じゃあできるな」

「それ」

「迷惑な客の告発ってことでな」
「表向きの理由はそれであった。」

「それでやるからな」

「ああ、頼んだぜ」

「それじゃあな」

「こうして話が密かに進んだ。そうしてだ。」

「肝心のテレビにおいてもだ。鳩山は続けて失態を犯したのだった。」

「ある左翼団体の抗議デモがあった。この男はそれを全面的に応援していた。」

「三千人も集まりました」

「三千人ですか」

「はい、三千人もの抗議ですよ。これが民衆の声なんです」

こう言っていたのだ。だがこの数はすぐに三千人もいないことがわかった。千人もいないことがすぐにわかってしまったのだ。

だが鳩山はこのことに対してだ。こう言ったのだった。

「数の問題ではありません」

この言葉にだ。視聴者達は呆れた。鳩山とニュース番組に抗議が殺到した。

しかし鳩山はそれを無視した。そしてまたやったのだった。

ある国が日本との試合の後にあるうことがマウンドに旗を突き刺した。このスポーツにあるまじき行動を擁護したのである。

これにもだ。またしても抗議が殺到した。

「御前もうスポーツ語るな！」

「何だそりゃ！」

「御前元々スポーツ報道出身だろうが！」

「ふざけるな！」

こう抗議が殺到した。しかし今回もだった。

第三章

鳩山は無視した。そして三度目はさらに悪質だった。

ある会社の社員の告発があった。だがそのテレビに出て来た社員はだ。

その会社の人間ではなかった。鳩山の所属事務所の人間であった。つまり自分の息のかかった人間に芝居をさせてだ。視聴者を騙そうとしたのだ。

今度ばかりは誰もが怒り狂った。抗議はさらに大きくなった。

そしてだ。ここで、であった。銀座のその店のことがネットに出て来たのだ。

そこではまさに言いたい放題でセクハラの限りを尽くす鳩山がいた。だらしのない姿で酔っ払いだ。無法の限りを尽くすその姿が流されたのだ。

これは瞬く間にネット中で騒ぎになった。これによって鳩山への抗議は頂点に達した。テレビ局や所属事務所には抗議どころかデモ隊が来た。当然ながら視聴率は暴落しスポンサーも離れていった。

こうなつてはとうしようもなかった。テレビ局も手を打った。

番組は打ち切りとなり鳩山は降板となった。そして所属事務所も彼を解雇した。

彼は何処にも出ることができなくなりだ。しかもだ。

これまでの悪事のこと訴えられた。セクハラに意図的な捏造報道のことが詐欺罪として告訴されたのだ。詐欺についてはいささか強引な解釈であったよう検察に受理されなかった。だがセクハラは別だった。

そのセクハラ裁判は一つではなく幾つもあった。その裁判費用で財産を失つていった。最後には家を手放し家族からも絶縁されてしまった。

この窮地に半ば壊れてしまった彼はだ。ある行動を取った。

何と中東に行き報道をはじめたのだ。それをパソコンに実況しはじめたのだ。

「ここがその戦場です」

砲撃が乱れ飛ぶ中をだ。焦点の合わない目で語る。表情は虚ろだ。砂塵の中で語っている。

「ここで多くの兵士達が……」

言葉は最後まで言えなかった。砲弾の直撃を受けて吹き飛んでしまった。それにより身体は四散してだ。首が大きく跳ね上がった。

その首が地面に落ちて転がる。その一部始終がネットで流れたのだ。これがこの鳩山という男の無様な最後であった。

それを見てだ。誰もが言った。

「自業自得だな」

「ああ」

「本当にな」

誰も同情しなかった。

「これも当然の末路だな」

「自分が招いたことだからな」

「ざま見ろ」

彼の過去を知っているからこそその言葉だった。

「地獄に落ちろ」

「そのままな」

「いい末路だったぜ」

「全くだ」

葬儀には誰も出なかった。それどころかネットではその死んだ場面での書き込みはまさにその死を喜ぶものばかりであった。

これがこの鳩山の一生だった。その栄華の果てには無様な末路があった。その無惨に落ちた首の末路はだ。そこを通りがかった戦車に踏み潰されてしまった。こうなったのは何故か、彼は最後までわからなかった。だがその無様な末路だけは事実だ。人々の喝采を浴びたのであった。

自分の口

完

2010・10・6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3232r/>

自分の口

2011年3月2日22時55分発行